

第7回 安心・つながりプロジェクトチーム 会議 議事録

(開催要領)

1. 開催日時：令和7年7月31日（木）15：00～15：50
2. 場 所：中央合同庁舎8号館5階共用C会議室
3. 出席者（構成員）：
石田 光規 早稲田大学文学学術院文化構想学部教授
大西 連 内閣府孤独・孤立対策推進参与
（特定非営利活動法人自立生活サポートセンター・もやい理事長）
勝部 麗子 社会福祉法人 豊中市社会福祉協議会 事務局長

(議事次第)

1. 開会
・三原内閣府特命担当大臣挨拶
2. 議事
・安心・つながりプロジェクトチーム 取りまとめ報告書（案）について
3. 閉会

(配布資料)

- 資料1 安心・つながりプロジェクトチーム 取りまとめ概要（案）
資料2 安心・つながりプロジェクトチーム 取りまとめ報告書（案）
資料3 安心・つながりプロジェクトチーム 取りまとめ資料集（案）

参考資料1 取りまとめ構成案

（第6回安心・つながりプロジェクトチーム資料2）

参考資料2 単身高齢者等の孤独・孤立の予防に向けた論点

（第5回安心・つながりプロジェクトチーム参考資料）

○大西参与 皆さん、こんにちは。よろしくお願いします。

ただいまから、第7回「安心・つながりプロジェクトチーム会合」を開催いたします。

本日の第7回会合は、報告書の取りまとめを行いたいと思います。本日も三原孤独・孤立対策担当大臣と友納内閣府大臣政務官の御出席をいただいております。

まずは三原大臣から御挨拶をいただきたいと思います。お願いします。

○三原孤独・孤立対策担当大臣 孤独・孤立対策の三原でございます。

本プロジェクトチームにおきましては、単身世帯の増加等に伴う孤独・孤立の問題の深刻化を見据えて、長期的視野に立ち、現役世代を含めた孤独・孤立の予防に取り組んでいくことが必要との認識の下、本年2月の立ち上げ以降、多くの団体にヒアリングを実施し、議論を重ねてまいりました。今月2日には、勝部さんにアレンジいただきまして、豊中市社会福祉協議会が運営いたします「豊中めぐり」や「びーの×マルシェ」等も視察をさせていただきまして、退職後の男性やひきこもり経験のある方など、当事者の皆さんから生の声をお聞きさせていただいたり、多くの示唆が得られたところであります。本当に皆さんといろいろなお話をさせていただきました。役割を自然と感じ、野菜作りに精を出している皆さんの笑顔が忘れられません。

本日は、これまでのヒアリングや視察の集大成として、構成員の皆さんに御尽力いただいた取りまとめ報告書案について議論いただくこととしております。石田先生、大西さん、勝部さんにおかれましては、ぜひ最後まで闊達な御議論をいただいて有意義な取りまとめにつなげたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○大西参与 大臣、ありがとうございました。

続いて、友納政務官からも一言お願いいたします。

○友納政務官 皆さん、本日もありがとうございます。考えてみれば、恐らく毎回参加をさせていただくことができました。皆様から本当に多くのお話を伺うことができました。それで取りまとめにつながりましたこと、構成員の皆様をはじめ、御協力いただいた皆様に感謝申し上げたいと思います。

やはりどの世代においても自分の役割とか、人の役に立っているといったものがあるというのがすごく重要なのだなということが分かりましたし、居場所づくりというと何となく場所をつくることを考えがちでしたけれども、それだけではなくてタグづけという言い方をしておりましたけれども、やりたいことや手段で人を集めてそれが自然に居場所になっていくということもあるのだなということもよく分かりました。

支援者についても、コーディネーターやつながりサポーターのような方々もいれば、さらにリーダーになってくださるような方も必要だとか、本当に多くのことを今回気づかせていただきました。本当に感謝申し上げたいと思います。今日、取りまとめをこれからしていきますので、今日も有意義な意見交換ができればと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

○大西参与 ありがとうございました。

それでは、配付資料の確認と委員の出欠状況について、事務局より説明をお願いいたします。

○事務局（成松孤独・孤立対策推進室長） 7月8日付で江浪の後任として室長を拝命しました、成松です。

配付資料につきましては、お手元の資料1から資料3まで、あと、参考資料1及び2になります。不足等がございましたら、事務局までお知らせいただければと思います。

次に、構成員の出欠状況ですが、本日は大西参与、石田構成員、勝部構成員、全員に御出席いただいております。以上でございます。

○大西参与 ありがとうございます。

それでは、早速議題に入ってまいりたいと思います。議題は、「安心・つながりプロジェクトチーム 取りまとめ報告書（案）について」となります。前回のPT以降、構成員間においておおむね構成案に沿った形での取りまとめ報告書案の検討・議論を進めてまいりました。構成員を代表しまして、私から取りまとめ報告書案についてポイントを絞って説明をさせていただきたいと思います。資料1の概要ペーパーに沿ってお話をしていきたいと思います。簡単にといいつつ10分ぐらい話すかもしれませんので、申し訳ないのですがお付き合いいただければと思います。

「安心・つながりプロジェクトチームの取りまとめ（案）」ということで、副題は「お互い様のつながりづくり」としております。支援する・されるでもなくて、お互い様ということが、これまでの様々なヒアリング等でも見えてきたということで、こういった副題にさせていただいております。

ポイントが3点ございます。最初に報告させていただきます。

1つ目は、居場所づくりは、日常生活動線上で「楽しいこと」「やりたいこと」が重要。「役割」や「出番」をつくり「頼る」ということが1つ目のポイント。

2つ目は、民間企業は、事業活動を通じたつながりづくり、社員間・社員と地域とのつながりづくりの重要な担い手であるということ。

3点目は、退職後の孤独・孤立は皆が直面し得る課題である。社会や地域とのつながりづくりなど、現役時代からの備えが重要だということをポイントとして掲げさせていただきました。

上から2つ目の囲いを御覧いただければと思います。今後、我が国では単身世帯のさらなる増加が見込まれ、2050年には全世帯の44.3%が単身世帯になるとされております。また、PTにおいては、配偶者や子と同居していて現在単身でない者についても離別や死別により単身になる可能性があるなど、単独世帯の発生パターンはライフステージにより多様であるとの指摘もありました。これを踏まえれば、今後は誰もが単身者となることが当たり前の時代となっていき、孤独・孤立のリスクを抱える単身の方が増加する懸念があります。こうした状況の中、年齢を重ねて身体機能や認知機能の衰えといった誰でも直面し得る高齢者の課題を抱えつつも、社会や人々とつながりながら誰もが安心して単身で生き

生きと暮らしていけるような社会づくりに取り組んでいくことが必要です。

このためには、①の身寄りがない状況にある高齢者等の支援に係る施策と、②の孤独・独立の予防のための中長期的な視点に立った対策という2つの観点から対策を講じることが重要であると考えます。

グレーの吹き出し部分ですが、①の施策については、厚生労働省等の関係省庁や地方自治体において意思決定支援や身元保証、死後事務等について現在様々な施策・政策が講じられ、また、有識者による議論が深められているところです。このため、本P Tの議論の射程には入れつつも、関係省庁との役割分担等の観点から、①は議論の状況等を把握することを中心に据え、P Tにおいては②を中心に議論を深めることといたしました。具体的には、現在単身で身寄りのない高齢者の孤独・孤立の予防と将来を見据え、現役世代を含め今後増加していく単身者が高齢期に至っても社会とのつながりを持ち、孤独・孤立状態に至らず安心して高齢期を過ごすことができるような中長期的視点に立った対策について、緑色の枠のところに記載の3つの論点を設定し、ヒアリングと議論を行ってまいりました。ヒアリングには多くの団体の方に御参加をいただいて様々なお話をさせていただきまして、それを基にこのP Tでの議論と今後求める政策的な対応について取りまとめさせていただきました。

まず、1つ目の「居場所・つながりづくりの在り方」ですが、多様な居場所づくりの促進の観点からは、1ポツ目、人々のつながりは孤独・孤立の予防のために重要である一方、人間関係がストレスになったり、つながりがしがらみになることへの危機感もあるため、SNS以上しがらみ未満の緩やかなつながりが求められるという視点がありました。これはむすびえさんだったり、その辺りのヒアリングの中でお話が出てきたところかなと思います。

2ポツ目、居場所には大まかに分ければ交流型と支援型のものがあり、それぞれの特性を意識した居場所づくりが重要であること、また、多数の居場所が提供されどこもという視点と多様な居場所が提供されどこかという視点を両立させる必要があるということ。

3ポツ目、居場所に多くの人が集うためには、当事者の課題に着目するのではなく、例えば、当事者本人が好きなことや、やりたいことなどをタグとして、多様なタグに応じた居場所づくりが重要であること、まさに三股町の社協さんがやられているCOMMUNITY DESIGN LAB.の取組などはタグという言葉が使われていましたね。

4ポツ目は、自分たちが行きたい、楽しいと思える居場所づくりが重要であること。

5ポツ目は、住民の生活動線上に居場所をつくることや、仕切りや壁を取り払い、つながりが自然と生まれる空間づくりを行うことも重要であるとの意見がありました。これは愛川舜寿会さんの春日台センターなどでもそうですね。

こうした意見、議論への対応の方向性について御説明をしてまいります。当事者の属性に合わせた多様な居場所づくりを推進する観点から、内閣府のモデル調査事業の活用を通じ、地域の実情や特性に応じた先進的な取組を重点的に支援すること。

2つ目は、交付金により地方自治体の居場所づくりの取組や地方自治体、中間支援組織によるノウハウの共有を含む後方支援を後押しすること。

3点目は、居場所同士の有機的な連携のためにも、官・民・NPO等の関係者が顔の見える関係を築くことが重要であることから、交付金等を活用しつつ、各自治体における孤独・孤立対策の官民連携プラットフォームの設置の加速化を図ることが必要であると考えます。

続いて、担い手の確保に向けた取組の在り方の観点からについて御説明をします。真ん中のところですよ。

1ポツ目は、これまで地域の担い手として活躍していた退職後の60代のシニア層について、定年延長や定年後も働き続ける方の増加等に伴い担い手の不足に直面しており、担い手の育成等が不可欠となっていることなどが見えてきました。

2ポツ目、担い手といっても居場所のコーディネートを行うノウハウを有し、組織を束ねられるようないわゆるリーダーとしての担い手と、現場で居場所に参加し運営等を行う活動の担い手がおり、居場所等を持続可能なものとするためには双方の担い手の育成・確保が重要であるということも見えてきました。

3ポツ目、地域づくりに関わりたくてもきっかけがないなどの理由で担い手になれていない潜在的な担い手に対しては、タスクを小分けにし、無理なく手軽に活動に参加できるようにすることや、本人と地域活動とのマッチングを実施すること等により担い手の掘り起こしを図ることが重要であるということも見えてきました。

4ポツ目は、当事者本人に役割や出番をつくることにより、居場所につながるきっかけになるだけでなく、支援する側として主体的に取組に関わっていくケースもあります。このように居場所で役割を果たすことにより何かを成し遂げ、それが社会貢献につながっていくという構造をつくっていくことも担い手の確保の観点から重要であるとの意見もありました。豊中での取組などはまさにこれに当たるところかもしれないと思います。

こうした意見、議論への対応の方向性について、活動の担い手の確保の観点からは、つながりサポーターの役割が重要であり、地域の実情も踏まえ、地方自治体等の協力を得ながらつながりサポーターの発信促進を行っていくということが1つ目。

2つ目は、リーダーとしての担い手の育成・確保のためには、地域のリーダーとして活躍している方のノウハウの共有や新たなリーダーの養成を図るための研修の実施等が有効ではないかということ。

3点目は、潜在的な担い手への対応としては、内閣府が実施する実証事業等により得られた知見や民間のノウハウ等も生かしながら、本人に合った地域活動をマッチングする仕組みの全国展開に向けた検討を深めていくことがあるということ。

それから、民間企業もつながりづくりの重要な担い手であり、取組を促進する観点からは企業における取組モデルの構築が重要であることから、まずは事例や知見の蓄積を行っていくといったことが必要ではないかと考えることができます。ウエルシア薬局株式会社

さんや東京海上日動火災保険株式会社さんからのヒアリングでもこういった点があったかなと思います。

2つ目の論点②のところ、支援につなげる際の課題についてです。ここでいう支援とは、相談などを含めた広い概念ですが、相談することに意義を見いだせていない方に対しては、居場所への参加や身近な方が気にかかるといったことの積み重ねにより、困り事を抱えたときに支援を求めるハードルが下がると考えることができます。受援力や援助希求能力と言われるものもここに含まれるだろうと思います。

1 ポツ目ですが、個々人の意識醸成という観点では、孤独・孤立の問題は誰にでも起こり得るもので、孤独・孤立状態に至ることは個人の責任ではなく、相談することは恥ずかしいことですよ、という理解の浸透を図るということが必要であるということです。まさに法律や重点計画でも掲げられているところと共通するかなと思います。

2 ポツ目は、働く女性が増えたことで退職を契機に社会とのつながりを失いかねないという課題に皆が直面し得る状況になっているということ。今も中高年男性というところがフォーカスされるところはありますが、一方で、これからの時代には多くの方がジェンダーにかかわらず皆が直面し得るという視点も大事だということかなと思います。

3 ポツ目、こどもや企業の社員向けのつながりサポーターの普及を進め、こども・若者や現役世代の理解を増進していくことが重要であるということ。

4 ポツ目は、当事者を居場所につなげるためには、なるべく支援臭を打ち消しながらその方の役割や出番をつくり頼るなど、居場所に意義を感じ、自己肯定感、自己有用感を高められるような工夫が必要であるということです。この「支援臭」というのは育て上げネットさんがおっしゃっていたもので、私もNP0の人間なのでドキッとする言葉ではあるのですが、それも含めて結構重要な論点かなというところではあります。

こうした意見、議論への対応の方向性について、個々人の意識醸成という観点からは、スティグマの解消のため、毎年5月の孤独・孤立対策強化月間における周知啓発の継続やつながりサポーターの発信普及を継続的に一層促進していくことが求められます。

2つ目は、現役世代へのアプローチというところでは、特に民間企業に対してつながりサポーター養成講座の実施等、つながりサポーターの発信普及に向けた協力について働き掛けを行っていく。加えて、先ほど申し上げたとおり、当事者を居場所につなげるためには役割や出番をつくり頼るといった工夫が重要であり、こうした工夫の重要性について共通認識を形成すべく、機会を捉えて発信していくことが必要であるということ。

最後に3つ目の③ですが、PTでは行政が果たすべき役割やNPO等や民間企業に期待する役割についても活発な議論が行われたため、各主体の役割を簡潔に整理させていただきました。各地域でのつながりを再構築するためには、行政のみならず民間での取組も必要不可欠であり、官・民・NPO等が対等に相互につながる水平的連携がとりわけ重要であると考えます。

こうしたことを意識しつつ、まず一番左の国・地方自治体においては、官民連携プラッ

トフォームの構築といった官・民・NPO等との水平的連携の基盤づくりやノウハウの共有などの後方支援、それから孤独・孤立対策強化月間をはじめとした広報啓発など、各地域で多様な主体がつながりづくりに取り組むための基盤づくりや機運の醸成を図っていくことが求められます。

真ん中の市民社会組織やNPOなどですが、この中には当然勝部さんが所属されているような社会福祉協議会をはじめ、社会福祉法人さんを含め、多様な団体が含まれます。これらの団体はこれまで居場所・つながりづくりの担い手として地域の中で中心的な役割を果たしていただいており、今後もこれまで蓄積されたノウハウを生かしつつ、地域のニーズに応じた居場所・つながりづくりを行っていただくことが期待されます。

他方、多様な居場所が求められる中、1つの団体だけでは対応が難しいケースも想定されます。そうした場合に地域のほかの居場所や行政につなげられることが望ましく、そのためにも官民連携プラットフォームへの参画等を含め、平時から行政やほかの団体と顔の見える関係を構築し、互いの活動を把握し合うことが期待されます。ソンリッサさんの町会とNPOが一緒に活動することもそういうところかもしれないと思います。

最後に、一番右の民間企業ですが、PTにおいて事業活動を通じたつながりづくりや社員の地域の社会貢献活動への参加促進の取組など、様々なお話を伺い、つながりづくりにおける民間企業の役割を整理しました。企業におけるつながりづくりの取組を広げ、かつ、継続的に取り組んでいただくためには、継続性・経済性も考える必要があり、事業活動にうまく組み込んでつながりづくりを行っていただくことが期待されます。

他方で、企業は多くの方を雇用しており、雇用されている方々は多くの時間を職場で過ごすことになるため、社員のつながりづくりにおける企業の影響力も大きいと考えられます。このため、民間企業には社員の雇用主として社員の心身の健康の観点からの社員間のつながりづくりや、ボランティア休暇などを活用し、社員が積極的に地域とつながるきっかけをつくることが期待されます。ウエルシア薬局さんや東京海上日動火災保険さんなどでやられていた取組がヒントになっています。また、退職後に地域社会とのつながりをしない、孤独・孤立に至らないよう、退職後を見据えたつながりづくりの重要性について学ぶことができる研修等を実施することも期待されます。

以上、報告書全体について簡単に説明をいたしました。構成員一同として特に強調したいポイントについては冒頭の3点になるかなというところでございます。そのほか、今回のPTでは本当にたくさんの方にヒアリングの御協力をいただきましたので、得られた成果を余すことなく伝える観点から、別冊に事例集まとめているところでございます。是非御参照いただけたらと思います。

私からの説明は以上となりますが、石田さん、勝部さんから補足があれば、ぜひいただければと思いますが、いかがでしょうか。

○石田構成員 私はありません。

○勝部構成員 私も大丈夫です。

○大西参与 ありがとうございます。

本取りまとめ報告書案については、構成員の意見を盛り込み推敲を重ねており、おおむね御了承いただけたものと理解をしておりますが、本案をもって取りまとめとしてもよろしいでしょうか。

(「異議なし」と声あり)

○大西参与 ありがとうございます。それでは、こちらで安心・つながりプロジェクトチームの取りまとめをさせていただきたいと思います。皆様の活発な御議論のおかげで充実した取りまとめとなったと思っております。本PTでの議論は一区切りということになりますので、構成員の皆様から今回の取りまとめを受けての思いであるとか、PT全体を通しての感想など、ぜひ御意見を伺いたいなと思っております。

では、石田さん、勝部さん、僕の順番で行きましょうか。石田さんからお願いします。

○石田構成員 かしこまりました。

本当に半年間、半年間だったのかなと思うぐらいさっと終わってしまったなという感じがしまして、その間、7回もやっていたんだという思いです。この間、大臣、政務官、構成員の皆さん、本当にお世話になりました。ありがとうございました。

普段、私自身は実態調査といういわゆる統計調査のデザインをやっておりまして、統計だと何が何パーセント、それこそ孤独感を抱いている人が若年層で何パーセントみたいな形で大まかな数字で出てくるわけなのですが、こちらのプロジェクトの場合はそれと真逆のアプローチというか、本当に現場に出ている方の話を直接聞いて、その上で話し合うという形を取ったので、実に新鮮な感じがいたしました。そういった中で市民活動、社会活動を行っている方、あと自治体の方々、あと民間企業に勤める方という形で本当にバラエティーに富んだ方々のお話をたくさん伺いましたので、自治体ではこういうことで悩んでいるのかですとか、民間企業ではこういうことを考えてやっているのかということでもいろいろな気づきがあったということが非常に私自身にとっても重要な体験でありましたし、これから私自身も外で孤独・孤立のお話をするときにも、今回聞いたお話というのを生かしていきながら、いろいろなことやっていきたいなと思っております。

あと、実際に活動している方々を豊中に見に行かせていただいたわけなのですが、やはり見に行くことがとても大事だなということを実感しました。私自身は7月にゼミ生を連れて実は立川の育て上げネットに行きまして、夜のユースセンターを見学してまいりました。やはり見学をすると部屋の中でいろいろなことをしていっちゃって、びっくりするぐらいそれこそ普段あまり活動できないという方々というのを伺っていたのですが、明るくいろいろな活動をなさっていて、実際に行ってみると、なるほどこういう場所なんだと思ったりするんですね。それこそ地元こういった場所があるといっても、中に入らなければ、何をやっているのだろう、何をやっているか分からない、という思いを抱いている方もいるのかなと思います。そのため、地元の方々が見学をするという形のものと、よりこういった取組自体が進むのかなという感じがいたしました。実際の

ところ、連れて行ったけれども何をやっているか分からないと思うよりは、こういうことをやっているんだ、こうやって生き生きしているんだというのが見えてくるとますます良いなと思いますので、私もまた機会があったらまたゼミ生を連れていろいろなところに行きたいなと思っております。こういった機会をいただいたことを大変ありがたいと思っております。本当にありがとうございました。

○大西参与　ありがとうございます。

では、勝部さん、お願いします。

○勝部構成員　皆さん、7月はお越しいただいてありがとうございました。今もみんな思い出を語っております。本当にありがとうございました。

私はこの7回の会議に参加をさせていただいて、最初に石田先生から「つながりフレイル」という言葉を聞いたのが非常に衝撃的で、つながるといのは何か重ねていくとか、いろいろな努力をしないと諦めていくということが起きてしまって動けなくなっていく、そのこと自体も放棄するような状況も出てくるのだということ、つながり自体が弱っていくということ、これは非常に新鮮な気持ちで聞かせていただきました。

そう考えますと、しがらみと言われているいわゆる昭和や平成の時代に様々な地域のお祭りであったり、歴史あるもので地域に住んでいたら参加しないといけないといういろいろな当時のつながりの方法論というのがある意味一定様々なつながり方を構築してきたものがあったとするならば、人口がどんどん流動化していくような時代になってくると、今の時代には合わない部分も出てきている中で、令和の新しいつながり方について、今回非常に整理ができたのではないかなと思っています。昭和の遺産でここまで何となくごまかしてきていたというところが、それではもう難しいよ、ということを今回発信できたのではないかなと思っています。

その中でも、居場所というのは場所やカフェみたいな形態にとらわれていた感じがあったのだけれども、いろいろと実際の皆さんの話を聞いていただいたり、お話を私もヒアリングさせてもらったら、居場所というのは結局場所ではなくて役割や出番で、必要とされていると思えるから居場所になって、「行かないと」と思うことが元気にしているということになるので、つながりが人を元気にして、役割があるとみんな輝いていくというのが今回改めて整理ができたのは良かったなと思っています。

2点目が、SOSを出せない人、つながってなくてもいいやと思ってしまっている人たちに向かって、自己責任論ではないと。つながれないというのはやはりフレイルですから、機会がない人たちはなかなかそういうことを経て進んでいけないということなので、必要なときにまたそのつながりに戻れるということをぜひ国を挙げて広報もしていただきたいですし、私たち社会福祉協議会も様々な階層の人たち、また、年齢層の人たち、所属の方々に対して提供できるように努力していきたいなと強く思ったところです。

3点目が、今回の定年後のお話なのですがけれども、男女雇用機会均等法以降は女性もつながりがない人が地域にいっぱい出てきます。昭和、平成の専業主婦のイメージで、女性

は地域につながっていて、男性は会社人間という考え方から、次のステージに移り、皆が働いて、皆が社会の中でつながっていくための新たなつながりづくりができるプログラムがないとなかなか難しいよということを今回発信できたかなと思います。これを基に各自治体、また、NPOなどが力を合わせて、もちろん企業さんも会社にいる間から本当に地域にもっともっと出てきていただきたいなと思いますし、働いているうちから地域のことに関心を持てるようなサードプレイスみたいなところに参加できるようなことを、これも含めて何か福利になるような社会になっていくと、もっともっと皆さんの安心感が広がっていくのではないかなと思います。

ありがとうございました。

○大西参与 勝部さん、ありがとうございました。

私も簡単に、あまりまとまりのないコメントかもしれませんが、させていただければと思います。まさに大臣の能登の被災地の視察があって、藤沢のノビシロハウスさん、あおいけあさんの視察があって立ち上がってきたPTですけれども、数えてみたら本当にいろいろな団体さんのヒアリングをさせていただいて、今月だとはあまり信じられないですけれども、豊中にも行かせていただいて、すごく勉強になりました。いろいろ行かせていただいてヒアリングさせていただいた団体はそれぞれの分野ですごく有名な団体なのですね。例えば育て上げネットさんだったら若者の支援としては日本を代表する団体ですし、あとは三股町の社協さんなどは地域福祉、重層の取組で有名だったり、それこそ勝部さんなどは地域福祉もそうですし、生活困窮者の支援でも有名だったり、でも、意外と同じ場には呼ばれることがなかったと思うのです。要は結構制度や分野の好事例としては政府のいろいろなヒアリングや各省庁のいろいろなところに呼ばれていても、同じ場でこのように呼ぶことはなかったグループが実は結構多かったのです。おすすめの団体の話がいっぱい聞いて良かったみたいなこともあるのですけれども、それも含めて孤独・孤立対策が持っている射程の広さというか、それによってつながれる分野や当事者の属性などを超えて同じ場に来られて、そこで議論ができて、一緒にいろいろなことを考えられるというのは、実はすごくこの政策のめっちゃめっちゃ良い部分だなというのを思いました。まさに水平的連携という言葉は漢字で言うと5文字なのですけれども、実はすごく大変だと思うのですが、いろいろな苦労が地域ごとに政府の中でもありつつも、分野を越えてどう我々がつながっていけるのかというところを、こういうことをきっかけに地域の中でできていくと、令和のつながりというのを勝部さんがおっしゃいましたけれども、これまでの時代と違ういろいろな接点の持ち方、関係性のつくり方、連携の仕方みたいなことがもしかしたらできるのかなと思いました。

PTのヒアリングではウエルシア薬局さんにも来ていただきましたが、ウエルシア薬局さんの会長さんとは孤独・孤立対策強化月間の企画でも対談させていただきました。大変勉強になったのは、かつては右肩上がりになるように経営をやってきたのだけれども、もうそれではないと。今、店舗でウエルカフェといった取組を行っていますが、地域にどう

自分たちが貢献するかというのが、企業としてもすごく大事だということに70歳を過ぎて気づいたのだ、みたいな話をされていて、すごかったいいなと思ひまして。そういうカルチャーというか文化みたいなものをどう私たちが持てるのかみたいなこと、NPOもそうかもしれない、企業さんもそうかもしれないですけども、そういう雰囲気といいですか、価値観というか、私たちがお互い様というのはまさに今回の副題がそこだと思うのですけれども、それがもうちょっと広く浸透していくような、分断が起きがちな時代だと思うからこそ、そういう地に足のついた顔の見える関係構築に、このPTの報告書がスタートラインになってうまく広がっていったらいいなということを考えた半年間でございました。

いろいろ稚拙な進行もあったと思いますが、本当にありがとうございました。

では、締めくくりに友納政務官、三原大臣から一言ずついただきたいと思いますが、プレスが入室をいたしますので、しばらくお待ちいただければと思います。

(報道関係者入室)

では、締めくくりの御挨拶をお願いしたいと思います。まずは友納政務官、お願いいたします。

○友納政務官　ありがとうございます。7回にわたり充実した御議論をしていただきまして、本当に構成員の皆様には心から感謝を申し上げます。視察にも行かせていただきましてありがとうございました。

今の大西参与の射程の広さという話にかかってくるのかもしれませんが、今回のこのプロジェクトチームをすることで孤独・孤立対策の対策というものにすごく深みが増したのかなと思っています。その深みの意味は、今の射程の話もあるでしょうし、あとは現役世代の段階から考えていきましょうという当事者のそのときだけの話ではないですよという時期というか時間というものもあるでしょうし、あとは立場として受け手側のことだけを考えるのではなくて、担い手のことをどう考えるとか、あとは本当にそれぞれの立場で国、自治体、市民社会組織、NPO、そして民間企業。民間企業は大臣が含めてくださいましたけれども、民間企業の皆様もどう考えているかということで本当に幅広にいろいろなことを議論することができて、とても深みが増したのではないかなと思っています。

私たちとしては、ここまで持ってきてくださいましたので、これをさらに具体的な制度、政策につなげていくということがこれからとても重要になってくるのではないかなと思います。それをまたつくっていく上で、恐らくいろいろ壁にぶつかったり、どういうものにしていけばいいかという悩みも出てくると思いますので、ぜひ引き続き構成員の皆様にはお力をお貸しいただきまして、ここで作り上げてきたものが国民の皆様の元に届くようなものになるように取り組んでまいりたいと思います。

今日でこのPTは終わりかもしれませんが、どうぞ引き続きこれからもお力添えをしていただければと思います。ありがとうございました。

○大西参与 ありがとうございました。では、三原大臣、お願いいたします。

○三原孤独・孤立対策担当大臣 石田先生、大西さん、勝部さんにおかれましては、本年2月のプロジェクトチームの立ち上げから本日に至るまで、毎回幅広い観点から密度の濃い議論を重ねていただきまして、そして本日、こうして報告書を取りまとめることができましたこと、心から感謝を申し上げたいと思います。

今後、誰もが単身者となることが当たり前になる時代となって、孤独・孤立のリスクを抱える者が増加するといった懸念があります。また、石田先生からは、現代社会では1人で過ごす時間が長くなることでますます人と会わなくなる、言わば「つながりフレイル」というべき状態に陥る人が増えるのではないかという問題提起もございました。本報告書ではそうした懸念等を真正面から受け止め、将来も見据え、孤独・孤立の予防のための居場所・つながりづくりの在り方等について取りまとめておりまして、大変意義深いものであると考えております。

このプロジェクトチームの特色として、「予防」という観点を入れたことはとても大きな意味があったと私自身も思っております。このプロジェクトチームのヒアリングや視察を通じて本当に多くのことを学ばせていただきました。先ほど大西参与からも御説明がありましたけれども、例えば当事者の好きなこと、やりたいことに着目して多様な居場所をつくるのが結果として支援につながるということ、また、先日、勝部さんに御案内いただいた「豊中めぐり」がそうであったように、居場所において当事者に「役割」や「出番」をつくって「頼る」など、当事者が居場所につながることに意義を感じられるような工夫が大変重要であること、このような「支援臭」を打ち消すという観点は、正に目からうろこが落ちたという気持ちでございました。

さらに、担い手という観点で、構成員の皆様には居場所・つながりづくりにおいて民間企業に期待される役割を整理していただきました。これは画期的なことではないかと考えております。特に、雇用主として社員の退職後までを見据えてつながりづくりを行うということは現役世代の将来に向けての「備え」ということを促進するという意味でも非常に重要でございます。こうした取組が民間企業において一層促進されるように、政府としても積極的に取り組んでまいりたいと考えております。

今、御紹介したもの以外にも、ヒアリングに対応された団体の皆様から数多くの御示唆をいただき、それを構成員の皆様には事例集としてまとめていただきました。この事例集を含めて、この取りまとめ報告書は構成員の皆さんがこれまでの御経験を踏まえた鋭い視点から現場で精力的に居場所・つながりづくりに取り組む担い手の方々、そして当事者の方々の生の声を伺い、議論を重ねたことによりできた叡智の結晶であり、居場所・つながりづくりに取り組んでいる団体、そして取り組もうとしている団体の指針となっていくものだと思っています。

改めまして、石田先生、勝部さん、大西参与におかれましては、本当に御多忙のところ、毎回長時間にわたって精力的に御議論いただきましたことに感謝申し上げたいと思います。

そして、全ての回に出席していただいた、友納政務官にも感謝を申し上げたいと思います。

この取りまとめを契機に、居場所・つながりづくりに関する国・地方自治体の取組を一層進展させて、NPO等や民間企業における取組の機運を高めてまいりたいと考えます。誰もがどこかにつながり、役割を持つ、安心して生き生きと暮らしていける社会を築けるよう、関係省庁と密接に連携して力を合わせて対策に取り組んでいくことをお誓い申し上げて、締めくくりとさせていただきます。

今まで本当にありがとうございました。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

○大西参与 では、プレスの方は御退室をお願いいたします。

(報道関係者対室)

○大西参与 皆さん、ありがとうございました。

記者の皆様へのブリーフィングは私と事務局で対応いたします。

以上をもちまして、「安心・つながりプロジェクトチーム」を終了いたします。本当にありがとうございました。

(以上)